

E47 間質性肺炎のある関節リウマチ患者の脳出血

72歳の女性、約25年間関節リウマチの治療を受けている。
2年前から咳や息切れを自覚し、間質性肺炎の診断を受け、3週間前から入院していた。朝、意識状態の低下があり、頭部CT検査にて右被殻に出血巣がみられた。治療を受けるも2日後に死亡した。
この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名称			発病(発症)又は受傷から死亡までの期間 ◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年3か月、5時間20分)	約2日
		(ア) 直接死因	右被殻部脳出血			
		(イ) (ア)の原因				
		(ウ) (イ)の原因				
◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください。 ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください。ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください。	目	直接には死因に関連しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等	関節リウマチ、間質性肺炎		約25年、約2年	
	手術	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和 年 月 日		
(15)	死因の種類	解剖	主要所見			
		① 死及び自然死 ② 不慮の外因死 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火端による傷害 6窒息 7中毒 8その他 ③ その他及び不詳の外因死 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 ④ 不詳の死				
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県	市区町村
		傷害が発生したところの種類	1住居 2工場及び建築現場 3道路 4その他()	市 区 町 村		
◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください		手段及び状況				

【解説】

関節リウマチと間質性肺炎の患者さんが入院中に脳出血をきたした事例です。
基礎疾患としての関節リウマチと間質性肺炎がありますが、直接死因は脳出血によると考えられます。
このような場合は、直接の因果関係はないと思われ、「傷病経過に影響した傷病名」としてとらえるかどうかは、医師の判断によります。

E48 原発不明癌

70歳の男性、6か月前から頸部リンパ節の腫脹を自覚していた。病理検査で癌の診断を受け、全身の精査を行ったが、原発巣を特定出来なかった。全身状態が徐々に悪化し、死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

(14)	死亡の原因 ◆1欄、3欄ともに病態の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください	施設の名義	(ア) 直接死因 原発巣不明の癌		約6か月
		(イ) (ア) の原因	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間 ◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください (例：1年3か月、5時間20分)		
		(ウ) (イ) の原因			
		(エ) (ウ) の原因			
		手術	①所 2有	部位及び主要所見	手術年月日 平成 年 月 日 昭和
		解剖	①所 2有	主要所見	
(15)	死因の種類 ① 死及び自然死 ② 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火焔による傷害 } ③ 外因死 { 6窒息 7中毒 8その他 } ④ その他及び不詳の外因死 { 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 } ⑤ 不詳の死				
(16)	外因死の追加事項 ◆凶器又は確定情報の場合でも書いてください	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市区町村
		傷害が発生したところの種類	1住居 2工場及び建築現場 3道路 4その他()		
		手段及び状況			
(17)	生後1年未満で病死した場合の追加事項 妊娠・分娩時における母体の病態又は異状 1無 2有 [] 3不詳	出生時体重 グラム	単胎・多胎の別 1単胎 2多胎(子中第子)	妊娠週数 満 週	前回までの妊娠の結果 出生児 人胎 死産児 胎 (妊娠満22週以後に限る)
(18)	その他特に付言すべきことから 頸部のリンパ節腫脹で受診、病理検査で癌を確認したが、原発巣を確認できなかった。				

【解説】

癌の原発巣が不明の事例です。

病理解剖により、死因の詳細な検索を行うのが望ましいと思いますが、様々な事情でこれ以上の検索ができない場合もあります。

このような場合は、「原発巣不明の癌」という表記もやむをえないと思います。

E49 感染性心内膜炎

28歳の男性、2週間前から発熱や腹痛があり、病院を受診したところ、感染性心内膜炎の診断を受けた。即日入院し、抗生物質の投与が行われたが、翌朝、突然痙攣を来し、意識状態も悪化した。頭部CT検査で広汎な脳梗塞を指摘され、治療を受けるも翌日死亡した。

なお、血液培養で緑色連鎖球菌が検出された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

(14)	死亡の原因 ◆1欄目欄 ともに疾患の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください	I	(ア) 直接死因	脳梗塞		約1日
		(イ) (ア)の原因	感染性心内膜炎	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間	約2週間	
		II	表欄には死因に関連しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等		◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください (例：1年 3か月 5時間 30分)	
		手術	① 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 昭和 年 月 日
(15)		解	① 2有	主要所見		
		死因の種類	① 死及び自然死 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火端による傷害 } 外因死 { 6窒息 7中毒 8その他 } その他及び不詳の外因死 { 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 } 12不詳の死			
(16)		外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 30分	傷害が発生したところ	都道府市区町村
		◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください	傷害が発生したところの種類	1住居 2工場及び建築現場 3道路 4その他 ()	市 区 町 村	
		手段及び状況				

【解説】

感染性心内膜炎に起因する脳梗塞と考えられる事例です。

全身性の塞栓症を合併する頻度は比較的高く、特に中枢神経系の塞栓症は病態が重篤で、死亡率も高いといわれます。

死亡の原因の記載にあたっては、関連する病態を詳細に検討する必要があります。

E50 外因の関与が疑われる感染性心内膜炎

28歳の男性、2週間前から発熱や腹痛があり、病院を受診したところ、感染性心内膜炎の診断を受けた。即日入院し、抗生物質の投与が行われたが、翌朝、突然痙攣を来し、蘇生処置を行うも死亡した。治療に関連しない注射痕が左右肘窩にみられ、尿検査で覚せい剤が検出された。死因との関連は不明である。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

(14)	死亡の原因 ◆1欄、2欄ともに疾患の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください	施設の名前	(ア) 直接死因 感染性心内膜炎		約2週間
		(イ) (ア) の原因	不詳	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間	不詳
		(ウ) (イ) の原因		◆年、月、日等の単位で書いてくださいただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください (例：1年 3か月 5時間 20分)	
		(エ) (ウ) の原因			
	手術	部位及び主要所見	① 2有	手術年月日	平成 年 月 日 昭和
	解剖	主要所見	① 2有		
(15)	死因の種類	1病死及び自然死 外因死 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火焔による傷害 } { 6窒息 7中毒 8その他 } その他及び不詳の外因死 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 ⑫ 不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市 区 町村
		傷害が発生したところの種別	1住居 2工場及び建築現場 3道路 4その他 ()		
		手段及び状況			
(17)	生後1年未満で病死した場合の追加事項	出生時体重 グラム	単胎・多胎の別 1単胎 2多胎 (子中第 子)	妊娠週数 満 週	前回までの妊娠の結果 出生児 人 死産児 胎 (妊娠満22週以後に限る)
(18)	その他特に付言すべきことから 感染性心内膜炎の診断を受け、治療中に死亡した。心内膜炎の原因は不詳。				

【解説】

臨床的に感染性心内膜炎と診断された事例ですが、その原因として薬物乱用が疑われる事例です。明らかな病死と判断できない場合は、警察への届出が必要です。薬物の関与の度合いが具体的に判断できない場合は、原死因を「不詳」とし、死因の種類は「12. 不詳の死」を選択します。このような事例では多くの場合、法医学解剖が実施されることとなります。

E51 珪肺

72歳の男性、独居。約30年間トンネル工事に従事していた。15年前から労作時の呼吸困難があり、珪肺症と診断されている。10年前から在宅酸素療法を実施しているが、呼吸機能が徐々に低下していた。

6月3日、自宅を訪問したヘルパーが、室内で死亡しているのを発見した。警察の検視を受け、犯罪の疑いはなく、死後約1日と推定された。死因は珪肺による慢性呼吸不全と考えられた。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

(14)	死亡の原因 ◆1欄、3欄ともに疾患の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください。 ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください。 ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください。ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください。	(ア) 直接死因	慢性呼吸不全		約10年
		(イ) (ア)の原因	珪肺症(推定)	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間	約15年
		(ウ) (イ)の原因		◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。(例：1年3か月、5時間20分)	
		(エ) (ウ)の原因			
目	直前には死因に関与しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等				
	手術	① 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和
	解剖	① 2有	主要所見		
(15)	死因の種類	① 病死及び自然死 外因死 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火焔による傷害 } { 6窒息 7中毒 8その他 } その他及び不詳の外因死 { 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 } 12不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき 平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分 傷害が発生したところの種別 1住居 2工場及び建築現場 3道路 4その他() 手段及び状況	傷害が発生したところ 都道府県 市区町村		

【解説】

生前の状態から、慢性呼吸不全があり、その原因は「珪肺症」と推定されます。目撃者のない自宅死亡例では、警察への届出が必要なことも多いと思います。

生前の既往症に関する情報が得られにくい場合もありますが、死体の所見のみならず、生前の状態もふまえて総合的に死因を判断する必要があります。

E52 飛び降り自殺後のPTE

45歳の男性、X年6月5日午後1時頃、路上に倒れているところを発見された。5階建てビルの屋上に靴と遺書がのこされており、病院に搬送された。下肢と骨盤の骨折があるが、病因での治療で命を取り留めた。

意識も清明で、しばらく臥床が続いた。主治医とのやりとりの中で、自分で飛び降りたことを話した。転落の8日後の朝に突然、呼吸困難を訴え、そのまま意識を消失、心停止となった。蘇生処置に反応なく、死亡が確認された。超音波検査等の結果から、直接死因は肺動脈血栓塞栓症と考えられた。

警察に届出し、検視を受け、転落は自らの行為によるものと判断された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

(14)	死亡の原因 ◆1欄、3欄ともに死者の最終期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください。 ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください。 ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください。ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください。	施設の名称			
		(ア) 直接死因	肺動脈血栓塞栓症	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間 ◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。(例：1年3か月、5時間30分)	短時間
		(イ) (ア)の原因	深部静脈血栓症		不詳
		(ウ) (イ)の原因	骨盤及び下肢骨折		約8日
	(エ) (ウ)の原因				
	手術	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日	昭和 年 月 日
	解剖	主要所見			
(15)	死因の種類	1 病死及び自然死 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火傷による傷害 6 窒息 7 中毒 8 その他 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因死 12 不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき ○ 昭和 X年 6月 5日 午前 ○ 午後 1時 頃 傷害が発生したところの種別 1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他(路上) 市区町村 ○ ○ 都道府県 ○ ○ 都 区 町 村 ◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください。			
	手続及び状況	路上に倒れているのを発見された。ビルから転落したと思われる。			
(17)	出生時体重	単胎・多胎の別	妊娠週数		
	グラム	1 単胎 2 多胎 (子中第 子)	満 週		
	妊娠・分娩時における母体の病歴又は産後	母の生年月日	前回までの妊娠の結果		
	1 無 2 有	平成 年 月 日	出生児 人胎		
		昭和 年 月 日	死産児 人胎		
			(妊娠満22週以後に限る)		
(18)	その他特に付すべきことから 病院に搬送され治療を受けていたが、状態が急変したという。				

【解説】

自殺をはかり一命をとりとめたものの、長期臥床に起因する肺動脈血栓塞栓症と考えます。

検視の際に、治療を担当した主治医に立ち会いと書類の発行を求められることもあります。その場合は、「死亡診断書」、主治医以外が検案する場合は、「死体検案書」になります。

死因の種類は、この事例では警察の判断もふまえ、「9.自殺」となりますが、不慮の事故、自殺、他殺の判断が困難な場合は、「11.その他及び不詳の外因死」を選択します。

E53 脂肪塞栓症

58歳の男性、X年6月10日午前11時頃、道路で工事作業中に、普通乗用車と衝突し、病院に搬送された。体幹部と下肢を打撲し、大腿骨の骨幹部骨折と上腕骨頭に粉碎骨折がみられ、入院となった。

入院時、意識は清明で、昼食も普通に摂取した。事故の2日後に意識状態が悪化し、頭部CT検査では頭蓋内に出血などの異常はみられなかった。その後血圧が低下し、死亡した。

警察に届出し、検視を受けた。死因は脂肪塞栓症が推測された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

(14)	死亡の原因 ◆1欄目欄ともに病態の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください。 ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください。 ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください。 ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください。	施設の名称			
		(ア) 直接死因	脂肪塞栓症(推定)	免病(免症)又は受傷から死亡までの期間 ◆年、月、日等の単位で書いてください。1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年3か月、5時間20分)	不詳
		(イ) (ア)の原因	大腿骨及び上腕骨骨折		約2日
		(ウ) (イ)の原因	体幹及び下肢の打撲		約2日
		(エ) (ウ)の原因	(空欄)		
目	直接には死因に関与しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等				
手術	① 2有	部位及び主要所見		手術年月日	平成 年 月 日 昭和 年 月 日
解剖	1無 ②有	主要所見 大腿骨は骨幹部で骨折、上腕骨は粉碎骨折する。組織学的検査で肺に多数の脂肪滴。			
(15)	死因の種類 1病死及び自然死 2 外因死 不慮の外因死 ③交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火端による傷害 6窒息 7中毒 8その他 9その他及び不詳の外因死 10自殺 11他殺 12その他及び不詳の外因死				
(16)	外因死の追加事項 傷害が発生したとき ④昭和 X年 6月 10日 ⑤午後11時 分 傷害が発生したところの種類 1住居 2工場及び建築現場 3道路 ⑥その他(路上) 4その他 傷害が発生したところ 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 ◆法検又は確定情報の場合でも書いてください。				
	手段及び状況 道路で作業中、普通乗用車と衝突したという。				
(17)	出生時体重 グラム 1無 2有		単胎・多胎の別 1単胎 2多胎(子中第 子) 3不詳		妊娠週数 満 週
	妊娠・分娩時における母体の傷態又は貫状 1無 2有		母の生年月日 平成 年 月 日 昭和 年 月 日		前回までの妊娠の結果 出生児 人 死産児 胎 (妊娠満22週以後に限る)
(18)	その他特に付言すべきことから 病院に搬送され入院治療を受けていたが、状態が急変したという。				

【解説】

交通事故で骨折を生じ、治療中の急変死亡した事例です。

このような場合には、警察の検視ののち、法医解剖になることが多いと思います。脂肪塞栓症自体も、検案のみでの判断は困難だと思いますし、解剖検査を行った場合でも、後日の組織検査の結果をふまえ、最終的な診断に達する場合もあります。(解剖終了直後、死亡の原因は「不詳(検索中)」にて提出。(E37参照))

死因の種類は、この事例では「2.交通事故」となります。

E54 気管支喘息重積発作

38歳の男性、気管支喘息の既往があり、時折発作が出現し、吸入薬を用いている。X年3月10日、朝から喘息の症状があり、妻が車を運転して病院に向かっていたが、呼吸困難が増強し、途中で救急車を要請した。病院到着時には心肺停止状態で、気管内挿管を行い蘇生処置を受けるも回復せず、死亡が確認された。警察に届出し、検視を受けた。死因は気管支喘息の重積発作と考えた。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

(14)	死亡の原因 ◆1欄目欄ともに病歴の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください	施設の名称			
		(ア)直接死因	窒息		短時間
		(イ)(ア)の原因	気管支喘息重積発作	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間	不詳
		(ウ)(イ)の原因		◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください (例)1年3か月、5時間20分	
	(エ)(ウ)の原因				
	目	表層には死因に関連しないが1欄の集積対象に影響を及ぼした傷病名等	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和
	手術	① 有 2有			
	解剖	① 有 2有	主要所見		
(15)	死因の種類	① 死及び自然死 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火傷による傷害 } 外因死 { 6窒息 7中毒 8その他 } その他及び不詳の外因死 { 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 } 12不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき 平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分 傷害が発生したところの種類 1住居 2工場及び建築現場 3道路 4その他() 手段及び状況	傷害が発生したところ 市区町村	都道府県 市区町村	
(17)	生後1年未満で病死した場合の追加事項	出生時体重 グラム 1無 2有 [] 3不詳	単胎・多胎の別 1単胎 2多胎(子中第 子) 母の生年月日 平成 年 月 日 昭和	妊娠週数 満 週 前回までの妊娠の結果 出生児 人胎 死産児 胎 (妊娠満22週以後に限る)	
(18)	その他特に付言すべきことから 朝から喘息症状があり、心肺停止状態で病院に搬送され、蘇生処置に反応なく死亡が確認された。				

【解説】

気管支喘息の重積発作による死亡です。

生前の状況も併せて死因が判断できる場合もありますが、不明な場合には警察の検視を受ける事もあります。

検案時の死体所見や状況、既往歴などから死因を判断できない場合は、可能な限り剖検で死因を判断すべきと思います。

また、「その他付言すべきことから」は、書類作成者が補足すべき内容があると考えた場合に記載します。

E55 誤嚥性肺炎

75歳の女性、約10年前からパーキンソン病と診断され、現在Hoehn-Yahr 分類Ⅲ度。要介助状態で嚥下障害がある。2週間ほど前から発熱、喘鳴がみられ、病院を受診したところ肺炎と診断され、入院した。治療を受けるも肺炎が改善せず、死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

(14)	死亡の原因 ◆1欄、3欄ともに病態の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください	施設の名義			
		(ア) 直接死因	誤嚥性肺炎	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間	約2週間
		(イ) (ア)の原因	パーキンソン病		約10年
		(ウ) (イ)の原因		◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください (例：1年3か月、5時間20分)	
		(エ) (ウ)の原因			
手術	① 2有	部位及び主要所見		手術年月日	平成 昭和 年 月 日
解剖	① 2有	主要所見			
(15)	死因の種類 ① 病死及び自然死 ② 外因死 不慮の外因死 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火焔による傷害 6窒息 7中毒 8その他 その他及び不詳の外因死 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 ③ 不詳の死				
(16)	外因死の追加事項 ◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市区町村
		傷害が発生したところの種別	1住居 2工場及び建築現場 3道路 4その他()		
		手段及び状況			

【解説】

パーキンソン病の合併症としての誤嚥性肺炎による死亡です。

死因を判断する場合には、病態のみならず、生前の状況や経過も考慮します。

「その他付言すべきことがら」は、書類作成者が補足すべき内容があると考えた場合に記載します。

E56 転倒

75歳の女性、約10年前からパーキンソン病と診断され、現在Hoehn-Yahr 分類Ⅱ度。一部介助状態である。X年9月20日午前9時頃、自宅のベッドから移動する際に転倒し、頭部を打撲した。まもなく意識レベルが低下したため、家人が救急車を要請し、病院に搬送された。頭部CT検査にて急性硬膜下血腫と診断され、開頭血腫除去術が行われたが、脳腫脹が進行し、転倒の約12時間後に死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

(14)	死亡の原因 ◆1欄目録とともに死因の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください	(ア) 直接死因	急性硬膜下血腫	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間 ◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください (例：1年3か月、5時間20分)	約12時間
		(イ) (ア)の原因	頭部打撲		約12時間
		(ウ) (イ)の原因			
		(エ) (ウ)の原因			
	目	表層には死因に関連しないが1欄の傷病名に影響を及ぼした傷病名等	パーキンソン病		約10年
	手術	1無 ②有	部位及び主要所見 開頭血腫除去術、硬膜下腔に血腫	手術年月日	昭和 X年 9月20日
	解剖	①無 2有	主要所見		
(15)	死因の種類 1病死及び自然死 外因死 不慮の外因死 { 2交通事故 ③転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火焔による傷害 } 6窒息 7中毒 8その他 その他及び不詳の外因死 { 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 } 12不詳の死				
(16)	外因死の追加事項 ◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください	傷害が発生したとき 昭和 X年 9月20日 午前9時頃	傷害が発生したところ ①居 2工場及び建築現場 3道路 4その他()	傷害が発生したところ ○○ 郡道 △△ 区 市	手段及び状況 自宅でベッドから移動する際に転倒し、頭部を打撲したという。

【解説】

転倒による頭部打撲に起因する急性硬膜下血腫による死亡です。

歩行障害などのパーキンソン病による生活機能の低下は、転倒の誘因になっていると思いますが、転倒という事象自体は直接的な影響とはいい難く、Ⅱ欄に記載します。

この場合は外因死と考えられますので、警察への届出と、検視を受ける必要があります。

E57 アルツハイマー病

86歳の女性、約10年前にアルツハイマー病と診断され、現在ほぼ寝たきりの状態である。しばしば熱発がみられ、入院して治療を受けている。導尿による尿が混濁している。3日前から再び39℃台の高熱が続き、本日朝、ショック状態となり、死亡した。下部尿路感染から敗血症をきたしたものと考えられた。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載1】

(14)	◆1欄、3欄ともに死因の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください	施設の名称			
		(ア) 直接死因	敗血症(推定)	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間 ◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください (例：1年3か月、5時間20分)	約1日
		(イ) (ア)の原因	下部尿路感染		約3日
		(ウ) (イ)の原因	アルツハイマー病		約10年
(エ) (ウ)の原因					
		直前には死因に関与しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病等			
		手術	① 2有	部位及び主要所見	手術年月日 平成 年 月 日 昭和 年 月 日
		解剖	① 2有	主要所見	
(15)	死因の種類	① 死及び自然死 外因死 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火焔による傷害 } { 6窒息 7中毒 8その他 } その他及び不詳の外因死 { 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 } 12不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市 区 都 町 村
		傷害が発生したところの種類	1住居 2工場及び建築現場 3道路 4その他 ()		
		手段及び状況			

【適切な記載2】

(14)	死亡の原因	施設の名 称		発病(発症)又は受傷から死亡までの期間	約1日		
		(ア) 直接死因	敗血症(推定)			◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。(例:1年3か月、5時間20分)	約3日
		(イ) (ア)の原因	下部尿路感染				
		(ウ) (イ)の原因					
		(エ) (ウ)の原因					
目	直接には死因に関与しないが1層の疾病経過に影響を及ぼした疾病名等	アルツハイマー病	約10年				
(15)	死因の種類	手術	① 有 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和	
		解剖	① 有 2有	主要所見			
(16)	外因死の追加事項	① 死及び自然死		不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火傷による傷害 } 6窒息 7中毒 8その他 その他及び不詳の外因死 { 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 } 12不詳の死			
(16)	◆信頼又は確定情報の場合でも書いてください	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県	市区町村	
		傷害が発生したところの種類	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ()		市 区 町 村		
		手段及び状況					

【解説】

寝たきりのため下部尿路感染症を来し、敗血症によるショックとなったと考えられる事例です。

寝たきりになった原因はアルツハイマー病によるものであり、因果関係ありと判断される場合もあると思います。一方、アルツハイマー病はあくまで誘因である、という考えもあるかもしれません。この点は、書類作成者の判断に委ねられています。

E58 髄膜炎

2歳の男児、昨日夜から発熱し、本日は少量の食事を摂取したものの、嘔吐した。発熱が持続し、夕方からぐったりしてきたため、病院に連れて行ったところ、診察中に痙攣をきたした。入院し、治療を受けるも、状態が悪化し死亡した。髄液検査で白血球数の増加があり、塗抹標本で肺炎球菌と思われるグラム陽性の双球菌が観察された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

(14)	死亡の原因 ◆1欄、2欄ともに死者の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に四角を医学的因果関係の順番で書いてください	施設の名義	(ア) 直接死因 肺炎球菌性髄膜炎	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間	約1日
		(イ) (ア)の原因		◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください (例：1年3か月、5時間20分)	
		(ウ) (イ)の原因			
		(エ) (ウ)の原因			
		手術	① 2有	部位及び主要所見	手術年月日 平成 年 月 日 昭和 年 月 日
		解剖	① 2有	主要所見	
(15)	死因の種類 ① 死及び自然死 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火焔による傷害 } 外因死 { 6窒息 7中毒 8その他 } その他及び不詳の外因死 { 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 } 12不詳の死				
(16)	外因死の追加事項 ◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市 区 町村
		傷害が発生したところの種類	1住居 2工場及び建築現場 3道路 4その他 ()	()	
		手段及び状況			

【解説】

髄膜炎による死亡と考えられます。電撃的な経過をたどる例もあるといわれます。

臨床検査の所見(グラム染色など)から、起因菌が判断できるようでしたら、分かる範囲で記載します。髄膜炎が疑われる事例での髄液検査は、細菌検査が可能な場合には死後の死体検案においても有用な場合もあります。

E59 癌性腹膜炎

59歳の女性、3年前に卵巣癌の診断を受け、手術を受けた。

3か月前から腹部膨満感を自覚し、検査を受けたところ、癌性腹膜炎で腹水貯留を生じていることが明らかになった。化学療法により腹水は軽減したが、1週間前から腹部膨満と嘔吐がみられ、腸閉塞と診断され、治療を継続したが死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

(14)	死亡の原因 ◆1欄、3欄ともに病態の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください。 ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください。 ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください。ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください。	I	(ア) 直接死因	腸閉塞	発病（発症）又は受傷から死亡までの期間 ◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。（例：1年3か月、5時間20分）	約1週間
		(イ) (ア) の原因	癌性腹膜炎	約3か月		
		(ウ) (イ) の原因	卵巣癌	約3年		
		(エ) (ウ) の原因				
	II	直接には死因に関与しないが1欄の傷病名に影響を及ぼした傷病名等				
	手術	①所 2有	部位及び主要所見		手術年月日	平成 年 月 日 昭和
	解剖	①所 2有	主要所見			
(15)	死因の種類 ① 病死及び自然死 ② 外因死 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火焔による傷害 } 6窒息 7中毒 8その他 その他及び不詳の外因死 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 12 不詳の死					
(16)	外因死の追加事項 ◆信頼又は確定情報の場合でも書いてください。	傷害が発生したとき 平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ 1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ()	傷害が発生したところ 市 区 郡 町村	都道府県	
		手段及び状況				

【解説】

癌性腹膜炎による腸閉塞が原因の死亡例です。

原病（卵巣癌）に起因する死亡ですので、I欄の（ア）に直接「卵巣癌」と記載する場合がありますが、各種の検査結果から死亡に至る病態が明らかな例については、できるだけ詳細な病態の記載をお願いします。

この記載例の作成は
平成28-29年度厚生労働科学研究費補助金
(統計情報総合 研究事業)
「適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発」
により行われた。

研究代表者

木下博之 香川大学医学部人間社会環境医学講座・法医学 教授

研究分担者

池松 和哉 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科・法医学分野 教授

横田順一郎 独立行政法人堺市立病院機構 副理事長

加藤 稲子 三重大学大学院周産期発達障害予防学講座・小児科学 教授

鷺見 幸彦 国立長寿医療研究センター・神経内科 副院長

横井 英人 香川大学医学部附属病院・医療情報部 教授

宮武 伸行 香川大学医学部人間社会環境医学講座・衛生学 准教授

